

(曾於郡大隅町岩川八合原鳴神)

位置と環境

遺跡は、町の中心部から南に約2kmのところに所在し、八合原の北東方向の標高約185mの台地端に立地している。同台地上には、上八合遺跡、境木遺跡等が隣接して所在する。

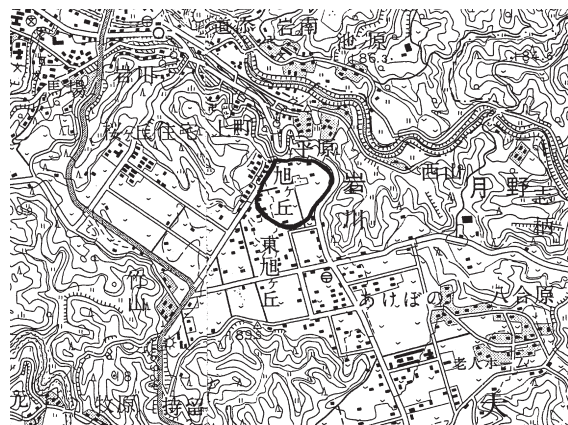
調査の経緯

遺跡は、平成4年から平成7年にかけて大隅町教育委員会が八合原の土地区画整備事業に伴い、確認調査や本調査を実施した。

遺構と遺物

平成4年の調査では、縄文時代晩期の竪穴住居跡、貯蔵穴、土坑、大形掘立柱建物跡等の遺構を検出した。遺物は、黒川式土器、入佐式土器、夜臼式土器、石皿、磨石、磨製石斧、打製石斧、石鏃等が出土した。また、この縄文時代晩期末頃のもので、夜臼式土器の石斧段階の埋納遺構（デポ）が発見された。この埋納遺構には、磨製石斧、局部磨製石斧、打製石斧、丸のみ、バチ型石斧、土掘り型石斧等22本の石斧類が重ねられた状態で、埋められていた。

平成5年の調査では、縄文時代晩期の竪穴住居跡、土坑、棟持柱を持つ掘立柱建物跡等の遺構を検出した。遺物は、縄文晩期の黒川式土器、入佐式土器、



第1図 鳴神遺跡の位置

夜臼式土器、組織痕土器（編布）、石器類が出土した。棟持柱を持つ掘立柱建物跡は、弥生時代中期のものが鹿屋市王子遺跡から出土しており、それより数百年遡る縄文晩期末頃の遺構と考えられ、稲作農耕文化と一緒に東南アジア方面から伝播したと推定される。

ほかに、平安時代～室町時代頃の溝跡、土坑、石敷きのある道路遺構、掘立柱建物跡等を検出した。遺物は、土師器、須恵器、青磁、黒色土器等が出土した。

平成6年の調査では、縄文晩期の竪穴住居跡、土坑等を検出し、黒川式土器、入佐式土器、夜臼式土器、石器等が出土した。

平安時代の掘立柱建物跡、円形周溝状遺構等が検出し、土師器、墨書土器、須恵器等が出土した。また当遺跡出土の土師器類の器種分類を行った。

平成7年の調査では、縄文後期の竪穴住居跡5軒を検出し、在地系土器と共に瀬戸内系土器が出土している。また、縄文晩期のやしの木らしき線刻画のある土器も出土した。

特徴

埋納石器22本の出土は、九州において初めてであり、縄文晩期の棟持柱を持つ掘立柱建物跡の検出も県内初めてである。

資料の所在

出土遺物は、大隅町教育委員会に保管されている。

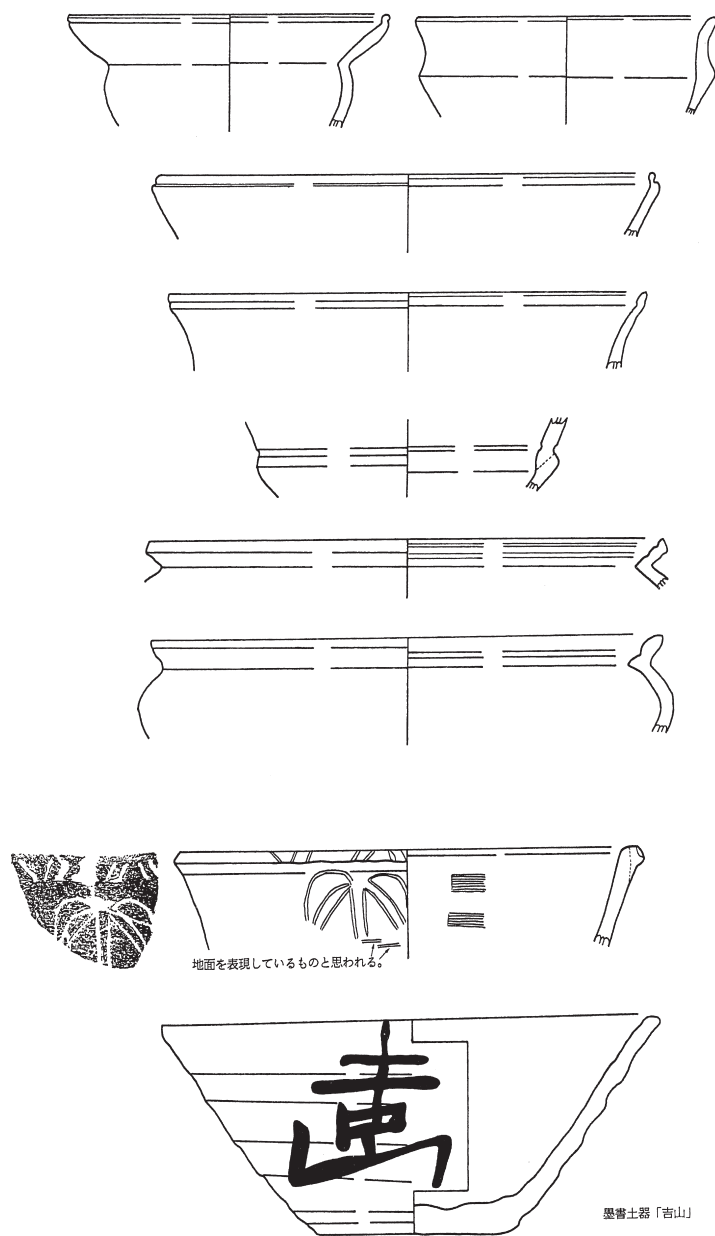
参考文献

- 大隅町教育委員会1993「鳴神遺跡」『大隅町埋蔵文化財調査概報』第1集
- 大隅町教育委員会1995「鳴神遺跡」『大隅町埋蔵文化財調査概報』第2集
- 大隅町教育委員会1996「鳴神遺跡」『大隅町埋蔵文化財調査概報』第4集

(清水周作)



写真1 縄文時代晩期末埋納遺構検出状況



第2図 出土遺物